2020年11月22日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書13章36～38節

説教題：砕かれてこそ

「人は、成功を通しては驚くほど学ばない」と聞いたことがあります。私も失敗ばかりしているので、実に慰められる言葉なのですが、「人は失敗を通して学んで行く」ということなのでしょう。あるいは「神が用いられる人は、一度、徹底的に砕かれた人である」という言葉も聞いたことがあります。人は本当に砕かれなければ、信仰の実を豊かに実らせて行くことは難しいのかも知れません。そして多くの場合、私達は失敗を通して砕かれるのではないでしょうか。「砕かれる」については、「イザヤ書」に素晴らしい御言葉があります。「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである」(イザヤ57:15)。「心砕かれて」という言葉は「めった打ちにされて、心がズタズタにされて、弁解も自分の主張も何も出来ないほど『私は惨めだ…』と思う」、そういう心の状態を言う言葉のようです。「砕かれる」ことは辛いことですが、しかし、それはまた神に近づくことの出来る恵みでもあると思わされます。そういうことをそのまま生きて見せたのが、弟子のペテロだと思います。やがてペテロは「大使徒」と呼ばれ、初代教会を導き、迫害の中を生きるクリスチャン達を励まし、支え続けました。その彼が、しかしイエス様の十字架に際して、情けない姿を曝します。「ペテロの弱さ」を具体的に描き始めるのが今日の個所です。今日は、ペテロの姿を通して「砕かれることの祝福」、そのような学びをします。

前回は、イエス様が、最後の晩餐の席で、弟子達に「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(13:34)という「新しい戒め」を与えられた個所を学びました。イエス様は、この戒めを与える前に、弟子達には真意の良く分からないことを語っておられたのです。「わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです」(13:33)。弟子達には、良く分からないながらも、重い言葉でした。この言葉が気になって「新しい戒め」の方は心に留まらなかったのではないかと思います。

そこで、今日の箇所です、ペテロが聞きます。「主よ、どこにおいでになるのですか」(36)。この時点で弟子達は、イエス様の十字架を理解することは出来ません。それでイエス様は「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます」(36)と間接的に言われます。しかしペテロは納得しません。「これまでもずっとついて来たではないですか。これからもついて行きます。なぜ『ついて行けない』と言われるのですか」、そういう思いが強かったのではないでしょうか。だから、その思いを伝えるために「あなたのためにはいのちも捨てます」(37)と言うのです。彼の心の中に嘘はなかったと思うのです。本当にイエス様のためだったら命も捨てることが出来ると思ったと思うのです。

しかし、彼はイエス様についていけない。2つの理由があります。イエスは十字架に向かって

おられました。十字架とは、イエス様が私達の罪を背負って、私達の代わりに私達の罪の罰を受けて下さるものです。十字架においてイエス様は、神の愛の業を為さるのです。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ 3:16)。この御言葉が十字架で実現するのです。十字架は、イエス様が神の御子、いや、愛の神であることが明らかにされるところなのです。そこに弟子達はついて行くことは出来ない。神だけが行かれるところなのです。

しかし、もう 1 つは、人間世界の現実として、弟子達はイエス様について行くことは出来ませんでした。申し上げたように、ペテロは、イエス様のためならいのちも捨てられると思いました。しかし、イエス様が逮捕され、鞭打たれ、自分にも危険が及んで来るのを肌で感じた時、彼は、イエス様のそばに立ち続けることが出来なかったのです。彼は、心ならずも「イエスなんて知らない」と言って逃げるのです。彼は、自分がそんなに弱いとは思わなかったのです。しかし、その現実に打ちのめされて泣きます。初めて自分の本当の弱さを知らされるのです。

注目したいのは、なぜ、そんな彼が、ローマ帝国中のクリスチャンの支えとなるような人物になったのかということです。ペテロが失敗を反省して「もう 2 度と失敗はしない。精一杯、失敗を償いながら頑張ろう」とそう決心したからでしょうか。皆さんは、何か「2 度とこんなことはしない。これからはこうこうする」と決心をされたようなことがあるでしょうか。ある人が友達に言いました。「俺は今禁煙をしているよ」。そうしたら友達が言いました。「お前はまだ 1 回目じゃないか。威張るんじゃない。俺なんか、もう 13 回も禁煙してるんだぞ」。13 回の禁煙をしているということは、12 回失敗しているということです。いくら重大な決心をしても、私達は弱いのです。私も、決心がいとも簡単に崩れる、その繰り返しです。私達の卑近な例とペテロの例を比べたらいけないかも知れませんが、しかし根っ子のところは同じだと思うのです。ペテロも、立派な反省をしたから—(反省もしたと思いますが)—それだけの理由で立ち直ったのではないのです。

では「復活」を見たからでしょうか。それは大きなことだったでしょう。ペテロは、大失敗をして、落ち込みもしたでしょう、故郷に帰り、漁師に戻っているのです。しかし、そこに復活のイエス様が現れ、「あなたはわたしを愛しますか」(21:16)と聞かれ、ペテロが本当に砕けた心で「愛します」と言うと、「わたしの羊を牧しなさい」(21:16)と、またイエス様の働きをするように招かれるのです。復活のイエス様に一切を赦され、もう一度イエス様の働き人に任命してもらった。この経験は大きかったと思います。いや、決定的だったと思います。この時、イエス様は、ペテロに殉教の予告を為さいます。普通は嫌でしょう。でも、徹底的に砕かれていた彼は、それを受け止めるのです。私は、人が砕かれることの意味が、ここにもあるような気がします。砕かれていなければ、前向きに受け止めることは出来なかったと思います。

しかし、さらに重要なことは、立ち上がったペテロに、復活のイエス様は「聖霊が臨むまで待ちなさい」と言われたということです。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます」(使徒 1:8)と言われたのです。ペテロは、自分は弱い、自分の力ではイエス様に

ついて行くことは出来ない、と分かって砕かれます。謙遜にさせられます。でも、その謙遜は、弱いからこそ神の力を仰ぎ、神の力を待ち望む、というところに結びつかなければならなかったのです。彼は、聖霊によって歩むようになるのです。そしてイエス様はここで「しかし後にはついて来ます」(36)と言われますが、彼は、本当にイエス様について行くようになるのです。

「クォ・ヴァディス」という映画を見ました。ローマのクリスチャン達に対するネロの迫害が熾烈を極めて来て、ローマのクリスチャン達は、何とかペテロだけはローマから逃がして、他の場所で伝道を続けてもらおうとします。ペテロは皆に説得されて、街道を供の少年と一緒に逃げます。ところがペテロは、向こうからローマに向かって近づいてくる太陽の輝きを見ます。良く見ると、その輝きの中を復活のキリストが歩いておられるのです。ペテロは地に跪いてイエス様の足を抱くようにして言います。「主よ。どこにおいでになるのですか¥クォ・ヴァディス・ドミネ」。36 節の言葉と同じ言葉です。イエス様は言われます。「あなたが私の民を捨てる時、私は再び十字架にかけられるためにローマに行く」。しばらく地面にうずくまっていたペテロは、起き上がると、踵を返してローマに向かって歩き始めるのです。そして、ローマに帰り、イエス様に出会ったことを皆に話しながら、皆を励ますのです。そして最後は、逆さ十字架に架かって、信仰を全うして殉教して行くのです。彼が十字架に架かった場所に、今のバチカンのサン・ピエトロ大聖堂は建っていると言われます。ペテロは、見事にイエス様の後について行くのです。

私は、ペテロが聖霊によって生かされ、最後まで支えられたことの重みを思います。私達は、信仰生活が、神に喜ばれるものから遠いのではないかとしばしば迷います。そして、神様に誠実でありたいと、喜ばれる信仰生活でありたいと願います。しかし、ある人が言いました。「しかし、意外に祈りが少ないのに気づかされる」。弱いと言いながら、神に頼っていない姿があるのではないでしょうか。聖霊に生かされようとしていない現実があるのではないでしょうか。

もう 40 年も前になりますが、1 人の先輩と話をしたことがあります。その方は、クリスチャンではありませんでしたが、信仰について真面目に考えている人でした。私は洗礼を受けていましたが、いい加減な信者でした。その人は、私にこう言いました。「クリスチャンになっても、聖書に書いてあることをとても実行出来ないと思う。クリスチャンとして生きて行こうと思ったら、修道院にでも入って、一生を神様に捧げるしかないのではないでしょうか。だから、私は今、とてもクリスチャンになれる気がしません」。私は、自分がいい加減に考えていたので、そんなに真剣に考えている人に、何も言えませんでした。でも、今ならこう言うでしょう。「自分の力だけで聖書の御言葉を実行しようとすれば苦しいし、自分には出来ないというところに落ち着くだろうけど、神の助けがあれば、神の助けを真剣に信じて、真剣に期待して行けば、私達は、変えられて行くのではないでしょうか。そして、何度でも失敗しながら神の助けを頂くことを学んで行けば良いのではないでしょうか」。「祈りが少ないことに気づかされる」という言葉の通り、私達は、神の力によって始まった信仰を、ついつい自分の力で為して行こうとするのではないでしょうか。神の力を求めない、聖霊の満たしを求めない、神の力によって私達の心が変えられて行く、心の方向が変えられて行くことを信じて求めることをしないことが多いのではないでしょ

うか。ペテロが変えられたのは、彼の力ではない、神が、聖霊が、彼を変えられたのです。そして、私達の心を、「神なんか分からない」と言って生きていた私達を、変えて下さったのも神です。であれば、神様は、聖霊は、これからも私達のことを変え続けて下さるに違いないのです。私達は、本当に自分の中に神の力が働いて下さることを信じて、求め続けて行かなければならないと思います。

ゴードン・フィーという神学者が、出版社から、パウロについての注解書の執筆を依頼され、編集会議に出席したのです。行ってみたら、何百ページもある本の中で、聖霊について割り振ってあるページが 5 ページしかなかったというのです。彼は言いました。「聖霊は、パウロにとって、たった 5 ページのリップサービスじゃない。パウロの信仰の大きなポイントなのだ。聖霊について 5 ページしか述べないで、パウロのことを書けるはずがない」。ペテロについても、同じことが言えるのではないでしょか。そしてそれは、私達についても言えることではないでしょうか。聖霊に生かされる生き方、神の力に導かれて歩む生き方、それこそがキリスト教の大きな特徴であり、また祝福であると思います。